

【曲目解説】

カール・オットー・ニコライは、1810年に生まれ、1849年に没したドイツの指揮者・作曲家です。その彼の傑作、「ウインザーの陽気な女房たち」は、ドイツにおける喜歌劇の中でも、作品のユーモアと新鮮さで顕著な位置を占めています。それは、この序曲においても同様で、性格・表現ともに喜歌劇の幕開けに相応しいもので、精巧な管弦楽法と相俟って音楽会・演奏会においても魅力的な作品です。歌劇の初演は、1849年3月9日ベルリンの王立劇場で行われましたが、作曲者はその8週間後の5月11日に卒中で亡くなりました。

モーツァルトの数多くの協奏曲の中でも、又その他の作曲家の協奏曲の中でも、独奏がフルートとハーブという組み合わせは極めて稀でしょう。(寡聞にして筆者はモーツァルト以外の「フルートとハーブのための協奏曲」を知りません。)フルートとハーブという楽器の組み合わせ自体は、音色・性質の点から魅力的なものと言えましようが、協奏曲の独奏としてはかなり異例なものです。モーツァルトが、フルートという楽器を好まなかったというのはよく知られた話ですし、ハーブも当時の楽器は現在のものと比べると半音階的な動きには制限がありました。そういう状況の中、モーツァルトが二つの楽器のための作品を書いたのは、1778年パリ滞在中に、彼が作曲の手ほどきをしたド・ギーヌ公爵家の令嬢の結婚式を記念する作品として依頼されたからでした。父公爵はフルートを、令嬢はハーブを演奏していたので、その二つを独奏とする協奏曲が出来あがりました。完成した曲は、その明るく爽やかな趣、澄みきった曲想・表現で比類ない傑作となりました。力強い分散和音による祝祭的な開始から、第2楽章の微妙な和声の変化、第3楽章の次々に繰り出される旋律のデコレーションまで聞く人の耳を引きつける魅力に溢れています。

「ベートーフェン」とは誰か？ 一般に外国語をカタカナで標記することはそうたやすいことではありませんが、しかしながら、そういう中でもより原語に近い標記を目指すことは大切だと思います、特に人名においては。さて、問題の「ベートーフェン」ですが、彼はオランダ系のドイツ人で、ドイツ語の発音からもオランダ語の発音からも、いわゆる「ベートーヴェン」とはなりません。一体いつ頃誰が「ベートーヴェン」と言い、定着したのか謎です。美術の世界では、例えば有名なゴッホも、以前は「ビンセント・バン・ゴッホ」と標記されていたものが、最近の展覧会などでは、「フィンセン(ト)・ファン・ゴッホ」と書かれています。「改むるに憚ることなかれ」音楽界へのささやかな提案として、今後「ルートヴィヒ・ファン・ベートーフェン」と標記しようかと思っております。さて、彼の第1交響曲ですが、1799年ベートーフェン29歳の時に作曲されたと思われます。曲の構成は、ハイドンの作品に倣ったものですが、中味は全く異なった趣です。凝った和音進行の冒頭、第1楽章主部のハ長調第7音(導音のシ)を強調した主題、第3楽章がメヌエットではなく実質的にスケルツォであることなど、青年ベートーフェンの意気込みが随所に見られます。初演は1800年4月2日、ウィーンにおいてベートーフェン自身が行いました。

カバレフスキー(1904~1987)は、ハチャトゥリアン、ショスタコーヴィチとともに旧ソヴィエト音楽界をリードしてきました。彼は作曲家としてだけでなく、優れたピアニスト、指揮者としても活躍し、さらに教育者としても大きな足跡を残しています。組曲「道化師」は1938年、M.ダニエルの児童劇「発明家と喜劇役者たち」のために作曲した音楽の中の10曲から成ります。劇は、田舎まわりの喜劇一座の生活を描いたもので、モスクワの中央児童劇場で初演されました。組曲は、翌1939年、レニングラードで初演されています。有名な「ギャロップ」を始め、ユーモアとペーソスが交錯しつつ、活気に満ちた大団円で締めくくられます。